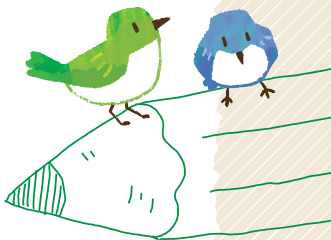


内閣府特命担当大臣(こども政策担当)賞  
小学生の部



「暗やみの中で。」

静岡サレジオ小学校  
3年 道端 元さん

「あー危ない！」僕はさげんだ。祖父が転びそつになつたのだ。

僕の祖父は網膜色素変性症という難病で障害者手帳一級だ。2019年に発症し、僕の顔がはつきり見えていたのは3才の頃までだ。この病気は遺伝子のキズが原因で光を感じる網膜が少しずつ障害を受け、五十円玉の穴からのぞいている様な見え方になり、いずれ失明する。今の医りようでは治すことができないのだ。祖父は徐々に見える範囲がせまくなり、上下左右が見えないので道を歩くのも一苦労だ。このため、昨年からは白杖とヘルプカードを身に着け

るようになった。

ある日、祖父が電車での出来事を話してくれた。電車の中で席が空いていなく立っていた時、白杖を持っていても席をゆずってもらえなかったぞつだ。祖父は足の筋力も弱っているで立っているのがとても大変だったはずだ。僕だったら白杖やヘルプカードを持っている人を見かけたらすぐにゆずるのに、なぜ周りの人達は気付いても誰も行動に移さないのでつまついて転びケガをしてしまった事を話してくれた。周りには沢山の人があったのに誰も手を差し伸べてくれなかったぞつだ。僕はこれらの話を聞いて悲しい気持ちになった。困っている人を助けるのは当たり前だと思っていたからだ。その時祖父は「みんな見て見ぬふりをしているのかもしれないな。」とさびしい顔をして言っていた。

どうして困っている人を助けないのか、僕は考えた。もしかしたら、勇気がなくて声をかけられなかったのかもしれない。また、白杖やヘルプカードが何を意味しているのか知らない人もいるのかもしれない。

やる気持ちを忘れてはいけなさと強く感じた。

れない。コロナで人との触れ合いが少なくなったのも一つの原因かもしれない。でもそれが自分の大切な人だったら絶対に助けたいはずだ。僕は祖父が大好きなので一緒に歩く時は祖父に僕の肩をつかまってもらい、盲導犬のように案内する。「ここに段差があるよ。」「次右に曲がるよ。」「と言つと祖父はいつも笑顔で「ありがとう。」「と言つてくれる。その言葉を聞くと祖父の役に立てた事がうれしくて胸がポカポカした。その時祖父は、「目が不自由な人は、周りの人達が少しでも声をかけてくれると安心するんだよ。」「と教えてくれた。祖父と過して障害者は「かわいそつな人」「何もできない人」ではなく、「少し違つたり方で頑張っている人」なんだと思つ。そして周りの人が手を貸せばよりくらしやすくなると思つた。

僕はまだ小学生で出来ることは少ないけれど、小さな事でも誰かの役に立てるならやってみようと思つ。そして大人になつたら難病を治せる医師になり、さらに障害のある人も無い人も安心してくらしを町を作りたい。祖父の話聞いて、僕は人を思い